

**17. 地域特産種増殖技術開発試験
(要 約)**

地域特産種増殖技術開発試験

増殖科 角 原 美樹雄

本試験は、地域特産魚介類の増殖技術を開発し、資源の増大を図ることによって、特徴ある地域的栽培漁業の定着化を促進することを目的に、国の補助により、昭和63年度から5ヶ年計画で地域特産種増殖技術開発事業として実施しているものである。

対象種であるノコギリガザミは、浦戸湾の特産種として、地域の漁業にとって重要な位置を占めており、最終年度を迎えた本年は、種苗生産技術、中間育成技術、資源添加技術等の開発に取り組んだ。

内容については、既報（平成4年度地域特産種増殖技術開発事業、魚類・甲殻類グループ総合報告書（1992））で詳細に述べているので、ここでは要約を報告する。

要 約

1. 種苗生産技術開発

- 1) 親ガニを個別飼育することにより、キチン質の分解を抑えることができると思われたが、斃死や自切の低減についての有意性は不明であった。
- 2) 第2次産卵を期待できる親ガニは、第1次産卵において少なくとも90%以上の卵割卵出現率が得られた個体であった。
- 3) 抱卵ガニを管理する水槽は、ネットによる二重底方式の他に砂底を利用することも有効であった。
- 4) 種苗生産に供するふ化幼生を得ることが期待できる親ガニは、第1次産卵で全収容親ガニの38.5%、第2次産卵においては、第1次産卵で卵割卵が出現した親ガニの15.8%であった。
- 5) 昨年に引続き抱卵からふ化までの平均有効積算水温を求めると、平均水温 $T(^{\circ}\text{C})$ と抱卵日数 D (日)の逆数 $1/D$ についての直線回帰式は、 $1/D = 0.0058T - 0.0789 (r=0.988)$ が得られ、基準水温 13.50°C で平均有効積算水温は $172.04^{\circ}\text{C} \cdot \text{日}$ であった。
- 6) 有効積算水温は、冷却水温下においても変化は認められなかったものの、抱卵期間の長期化は、途中脱卵を助長し発生が途中で停止する卵が確認された。
- 7) 比重と水温を調節した塩素消毒海水を飼育水とし、ナンノクロロプシスを使用した種苗生産で、 $M \sim C_2$ の稚ガニ40尾の生産にとどまった。
- 8) 濃縮淡水クロレラの使用は、安定した環境作りの点で有効と思われた。

2. 中間育成技術開発

- 1) 高知市漁業協同組合が、日本栽培漁業協会から稚ガニ200千尾を受け入れ中間育成を行った結果、平均甲幅 27.3mm の稚ガニを15千尾取りあげた。生残率は7.5%で生残密度は $37.5 \text{尾}/\text{m}^2$ であった。
- 2) 過去5年間の結果から推定した甲幅 20mm サイズの生残密度は $65 \text{尾}/\text{m}^2$ であった。

3. 資源添加技術開発

- 1) 浦戸湾の操業区域内におけるノコギリガザミの放流時資源量は、5,000～6,000 尾前後と推定された。
- 2) 浦戸湾では、9月を中心とした漁獲量が年間の漁獲量を左右し、甲幅 15.3 mm (C_5) サイズで3～6万尾放流すれば、放流効果が期待できると考えられた。
- 3) 小型サイズで放流した場合、必ずしも翌年の漁獲に反映されるとは限らないが、CPUEの上昇も見られることから翌々年の漁獲に注目する必要がある。